# 京都「被爆二世・三世の会」会報

京都市中京区壬生仙念町３０-２
ラボール京都５階
京都原水爆被災者懇談会気付
ＴＥＬ075-811-3203
ＦＡＸ075-811-3213
ＨＰ　http://aogiri2-3.jp

Kyoto Association of 2nd & 3rd Generation *Hibakusha*(Atomic Bomb Survivors)

５・３憲法集会　in　京都　（円山公園音楽堂）

中嶌哲演さん「隠れ病む人々と向き合って」つづき　第２回　2

核兵器廃絶に向けて
コンゴ共和国が核兵器禁止条約を批准　６１ヶ国目　6
核兵器禁止条約第１回締約国会議で何がやられようとしているか　6
「核兵器禁止条約参加署名」共同提出(第一次)のつどいに参加して　三山正弘　8

核兵器廃絶運動の原点を語り継ぐ　平　信行　9

会員から会員へ・みなさんからのおたより紹介　１１

本・ＤＶＤ・映画・番組の紹介と交流　１３
「２０３４米中戦争」「追跡！謎の日米合同委員会」「帰れない村」

SCRAPBOOK／「被爆の傷　心身から消えず」(京都新聞)　１５
「福島第１原発事故　甲状腺がん訴訟」(毎日新聞)　１５

編集後記　１５

２０２２年６月の行事カレンダー　１６

2022年4月17日　2022年総会記念講演＜インタビュー動画の上映＞

# 中嶌哲演さん「隠れ病む人々と向き合って」つづき　2

前号（４月号）からの続きを掲載します。

**■被爆者との出遭いが今の私の出発点**

私も幼少年期はそれなりの正義感があったりしました。青年期というのは、６０年安保の頃というのは、一方で社会的なマルクス主義の運動にダァーっと傾斜していった人たちと、それに対抗する側の思想として実存主義というのがあって、何か、死の問題だとか、個人的な内面に関わる苦悩や何かに深く関わっていく、そっちに目を向ける実存主義思想というのがありまして、私の場合、そっちの方に傾いていたのです。

そういう人間だった私が、やっぱり突破口を開いてもらったのは、原爆被爆者だったのです。この人の出遭いからどんどんどんどん社会的な関心が広がっていって、半世紀に及ぶ私の今日に至ってしまった。みなさんの、今の私を見ていただいている姿と、原爆被爆者と出遭う前の私とでは全然違う。自分で自分が信じられないほど変貌しているのです。

**■どうして“隠れ病む身”にならざるを得なかったか**

ＮＨＫが取材してくれた時、“隠れ病む身”というのを番組のタイトルにしたというのは、番組のディレクター自身も被爆者の隠れ病む身ということに注目してくれたからでしょうけど、どこまで掘り下げられていたかどうか。さらにもっとそれを掘り下げて、さらにそれを乗り越えていく道をどのように切り拓いていけばいいのか、ということが、本当に今問われていると思います。福島の原発事故の放射線で被ばくされた人たちは、ある意味では、原爆の被爆者の隠れ病む身の苦悩の道をまったく同じように辿りなおさせられている、そんな印象を私は受けています。

なんで隠れ病む身にならざるを得なかったか、そういう境遇になんで追い込まれてしまったのか？その原因について、日本はよく唯一の被爆国民だからと言って、いかにも被爆したことを国民としての認識があるんだ、という口調で語られるのですけど、本当の意味での被爆問題を、国民は共有できていないんじゃないか、と思っているのです。

福島原発事故の後、ものすごく盛り上がって、世論が湧きたったのだけれど、やっぱり数年、１０年経つと、今、ずーっと引いてきている。何故風化してしまうのかという、被ばくの問題が何故こんなに扱われてしまうのか、ということをみると、私は２つ３つ理由を考えているのです。

一つは放射能被ばくというものの特性というのが、みなさんご存じのように五感を感じにくいんですね。もちろん原爆被爆の場合は、原爆ですから、熱線や爆風や、いろんな外的なひどい目にあったり、それから強烈な放射線にさらされているから、あっという間に脱毛したり、皮が剥けたり、鼻血や血を吐いたり、様々な現象が五感で感じ取れる。直接被爆した人の場合は直接感じ取れるのですけど。

広島、長崎の場合は、被爆者と一口に言っても、決して直接被爆した人たちだけじゃなくて、爆心地から２～３㌔のところに入って肉親を尋ねまわったり、後片付けをしたり、軍隊に徴用されて救護活動にあたったり、爆心地をうろつき回ったり、そういう人たちも被爆者なんですね。

私が初めに救援活動をした頃は、爆心地から２㌔の範囲で２週間以内に足を踏み入れた人は全部被爆者で、被爆者手帳の交付もそういう条件があれば受けられていました。その人たちは二次被爆者と言ってますけど、放射線被ばくだけ浴びているから、自分が被爆者だという感覚すら持たな

かったんですね。

今度は、一旦とり入れて影響が及んでくる場合に、放射線被ばくの場合始末が悪いことに、遺伝子のレベル、細胞のレベルで影響が及んでくるものですから、実際の影響が表れるまでに時間がかかる。タイムラグがあるということですね。だから五感でとらえにくい、後でしか影響が出てこない。ということをいいことにして、核兵器を開発したり原発を推進する人たちは、そこの部分を過小評価して、被ばくを過小評価してどんどん進めてしまう。そこの問題があったように思いますね。

にも関わらず原爆被爆者がなんで隠れ病む身になるのか、というとそこに第２の問題がある。遺伝的な影響、そういうところに原爆に遭った人たちが、当事者との結婚をひかえたり、当事者の子どもさんやお孫さんへの遺伝的影響というのを、そういう部分だけはみんな過敏に受け取って、それが社会的差別、結婚差別やいろんな差別に関わっていく、そういうことのために原爆被爆者当事者自身が沈黙してしまう。自分が被爆者であることを言えなくなっていく。自分だけでなく、自身の子孫まで、家族にまで影響を及ぼしかねない、ということで口を閉ざしていったことが、やっぱり隠れ病む身の背景にあるように思います。むしろ核兵器や原発を推進する側は「遺伝的影響はない」という方にウェイトを置いてことを進めてきたわけですよね。

**■小浜地区の被爆者援護を始める**

私自身は１９６３年に被爆者と出遭っていて、実際に動き出したのは故郷小浜に１９６６年の春に帰ってきて、その１年後ぐらいから小浜保健所管内の被爆者たちを訪ね始めましてね、当時１２名の方が若狭地域から小浜保健所に登録されていました。それが仲間のお坊さんやキリスト教の牧師さんたちとも一緒に救援活動をしまして。広島から原爆症専門のお医者さんよんでね、健診をしてもらって、地元のお医者さんや地元の保健所が見逃しているような被爆症状をきちっと診断してくれました。

私たちは１９６８年に小浜の被爆者の人たちのつどいを設けまして、お話を聞いた時に、そのお知らせの第一号がこれなんですけど、「ほとんどの被爆者が原爆症を体験。不安は健康と医療費」という見出しで報告してます。やっぱり健康上の問題と経済的な不安と、被爆者は一体化してるんですね、悩みは。

「若狭地区原爆被爆者を守る会」こういうのが作られまして。私は地元の被爆者援護、小浜管内で始めたのです。被爆者と出会って、いろいろお話を聞いていきました。男性の被爆者の場合は、娘さんを結婚させてから被爆者手帳をもらいました、という人が多かったです。

小浜の保健所管内のある方は、軍隊で徴用されていってて、死体の後片付けとか、瓦礫の後片付けとか、そういうことで３０代、４０代前後でも徴用されて、広島に行ってね、被爆された方というのが結構おられたのですよ。暁部隊ですね。

長崎の女性の被爆者の方が小浜の人と結婚されて、嫁いで来られていて、女性の被爆者というのはその方ぐらいでしたけど、直接被爆されていた方でして、３回ないし４回妊娠されたのですけど、結局健康な赤ちゃんが産めなかった。死産、流産などによって３～４回とも子どもが産めなかったので、旦那さんからも離縁されて、原爆故老として長崎へ帰っていかれました。その時、長崎に帰っていかれる時、みんなで見送ったことも、その時の報告もこの資料に載っていますよ。

原爆故老という言葉があったのですよ。特に広島長崎でも爆心地近くの場合は、肉親もほとんどなくなっている場合が多いですから、独りで残されてしまう。

**■被爆者にしか分からない特有の強い倦怠症状**

この女性が小浜におられた頃は、私がお世話に行ったこともあるのですけど、電話で呼び出されるのですが、それまですごく元気にされていたのに、半日後、一日後には全然人が違ったようになって、体が気だるくて、いても立ってもおられない、座ってもおられない、ベターッと横たわってね、うわーっと紫斑が肌に出てきてね。健康のサイクルが、健康な時とそれが悪化する時と、それが一日の内、あるいは一週間の内にすごく変動するんですよ。だからまともな仕事ができない。

男の人で、ついこの間、１００歳過ぎまで生きられていた小浜の被爆者の方がおられましたけ

ど、この方など、まだ若い頃、子どもや奥さんなどからも「お父ちゃんは怠け者」と言われてね。家族からもそう言われながらも、それを耐え忍びながら、自分の体調を第一に考えて、その結果長生きされたのですけどね。でもやっぱり家族の中からさえそういうふうに言われますからね。被爆者にしか分からない倦怠感があるわけですよ。

そういう被爆者特有のいろんな悩みや症状がありますし、そして問題はこの報告書にも出ていますように、お医者さんにかかりたいけど医療費の不安というものがある。豊かな人ばっかりではないですからね。やはり自分の健康上の問題、経済的な不安、それから子や孫への影響。これらが共通して被爆者の問題としてあったと思います。

**■暁部隊**

広島から専門のお医者さんよんで、症状はしっかり診断受けられて、いろんな医療費も国からの認定被爆者になれば無料になったりね。その女性の被爆者の場合も国から認定受けられたので医療費なんかは随分国から出るようになりましたけどね。

そういうのは口コミで伝わっていって、同じ軍隊仲間で、まだ名乗り出ていなかったような人たちも出てきて、小浜保健所管内では１２人だったのが３０人に、３１～３２人に増えたりしたものです。

当人でなければ分からない状態を客観的に、そういう放射線被ばく症状に、専門のお医者さんやら小浜の保健所の嘱託医や小浜の市内の医者ですら、被爆者のそういう悩みを理解できなかった。

小浜の被爆者からよく宇品という地名とか、呉とか或いは暁部隊とかを聞きました。同じ暁部隊の隊員だったので、ということでお互いを証明しあってね被爆者手帳をとることができたのです。

**■被爆者の関わった福井県の反原発運動**

こういう援護活動の事務局までお世話していましたが、被爆者が主体的に事務局ができるようになられて、私も原発の方が忙しくなってきたので、ちょっと手を引かせて下さい、ということになってきたわけです。福井県の被団協では１９７５年から１９８５年まで１０年ほど事務局を預かっていました。

被爆者の人たちが、特に若狭管内の被爆者の人たちが原発に対して問題意識を持たれていて、非常に不安を持たれていました。高浜町に広島から引き揚げて来られた時岡さんという被爆者の方がおられました。元々は高浜町の旧家の庄屋さんの家の人でしたけど、この方が高浜原発にすごく疑問を持たれて、反対に立たれて、福井県の県民会議が１９７６年に結成された時には、福井県被団協の会長の立場で県民会議の代表委員になられました。その時、時岡さんがお元気だった頃は、私も県民会議の事務局の方もやっていたものですから、代表委員の時岡さんに大変お世話になりました。

福井県の反原発運動の場合、被爆者の方が警告していただいたということは当時大きかったのです。時岡さんは最初は若狭地区の被爆者の会の会長もされていたのですけど、福井県の被団協が復活しましてね、嶺北の人たちも含めて、それで時岡さんが福井県被団協の会長にも選ばれていたのです。その会長の立場で県民会議の代表にもなられた。

県民会議の代表委員は当初５人ほどおられて、自民党の敦賀市の**いそべじんぞう**さんという人までが代表委員になっていて、この方、９０歳過ぎまで長生きされましたけど、最後まで「わしは自民党でい続ける。決して離党はしない。自民党の中で原発に対して批判しなければならない」と言われていました。

福井県の県民会議の初期の代表委員というのは、そういう骨のある方たちをかかえていたのですよ。後はお医者さんとか弁護士さんですとかおられましたけど。ユニークはユニークでしたね。

反原発運動も若狭や福井県では、全国レベルでは原水禁、原水協が分裂してたり、社会党系、共産党系がなかなか一緒に運動できなかったりする中でね、福井県の反原発運動は一緒になってやってたんですね。小浜市民の会もそれが可能だったから有権者の過半数の署名を集めることができて、それが決定打となって小浜原発を食い止めることができたのです。そこにもつながっていったわけです。それがなければ小浜には４基の原発が動いていたわけです。

**■広義のヒバクシャ　―　原爆被爆者数を超えた原発労働者数**

原爆被爆者だけじゃなくて、原発事故の被ばく者、原発の中でそれこそ放射線管理手帳を持って働いている被ばく者の方、核実験の被ばく者、もういろいろな被ばく者がいて、世界中にたくさんいると思います。私も最初は原爆被爆者の援護活動からスタートしていますけど、だんだんヒバクシャの概念が広がってきました。時とともに。

広義のヒバクシャの中に、原爆の被爆者だけじゃなくて、原発被ばく労働者もおられます。明らかにヒバクシャなんですけど。放射線影響協会というのがあります。原子力ムラに参加している企業の、電力会社はじめ、放射線被ばく労働をしなければいけない企業が放射線影響協会という協議体を作って統計的なデータを毎年こうして発表しているのですけど、年に一度、日本の国で原発が動き始めてから新年度に至るまでの累計数を発表しているのです。これによりますとね、去年の３月末現在で６９万何千人かに達しているのです。管理手帳をもらって被ばくする職域で働いてきた労働者がですね。今年の３月末現在では７０万人を突破すると思うのですよ。その累計の数は。ところが広島、長崎の、２世３世まで含むとどうかか分かりませんが、一般的に言われてきたことは全体で６５万人の原爆被爆者と言われてきた。

だから平和利用の名前の下に、被ばくを余儀なくされる区域で働く労働者は必ず被ばく管理手帳を持って働かなければいけない、ということは、その手帳を持っている人はヒバクシャなわけですよ。平和利用による原発被ばく労働者が７０万人を超えた、６５万人と言われる原爆被爆者の数を超えたということは、やっぱり被ばく者の問題を、カタカナのヒバクシャで考えていく場合に、必須の問題として考えていかなければならない問題だと私は考えます。

若狭の原発でもかって、アメリカから黒人労働者が来てたり、それからフィリピン、ブラジル、ベトナムとか、その他東南アジアの方からとか、外国人が使われていた時代が結構あったんですよ。

（以下、次号に続きます）

２０２２年

## ノーモア・ヒバクシャ近畿訴訟支援のつどい
## ２０年のたたかいを次の前進に

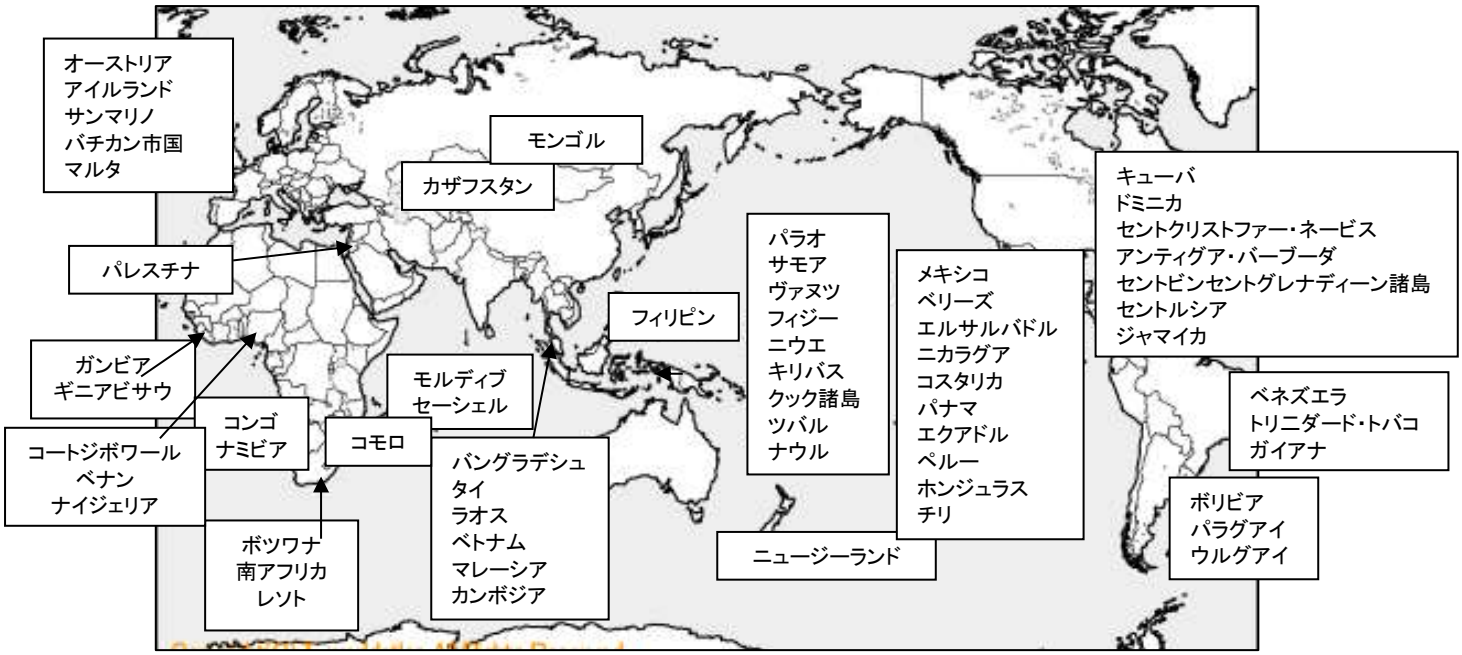
■6月１１日(土) 13：３０～16:００
■大阪グリーン会館ホール
■《プログラム》
第１部　記念講演　「被爆者とともに・・・私たちの到達点と未来への課題」
奈良大学教授　高橋　博子　さん
ピアノ演奏　三浦直樹さん（弁護団）
第２部　これまでの原爆症認定集団訴訟・ノーモア訴訟のとりくみをふりかえり、「到達点と今後の課題」の観点から
弁護団・支援・被爆者(原告)などからの報告と討論
コーディネーター　西　晃　さん（弁護団）

# 核兵器廃絶に向けて

## コンゴ共和国が核兵器禁止条約を批准　批准国 61 ヶ国に

アフリカ中西部のコンゴ共和国が５月 17 日、核兵器禁止条約の批准書を国連に寄託しました。国際ＮＧＯ「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ＩＣＡＮ）が同日に発表しました。これにより同条約を批准した国は６１ヵ国になりました。アフリカ大陸では１２番目の批准国です。コンゴ共和国の下院議長は今年２月、「核兵器禁止条約の批准は非常に重要であり、世界の平和と安全保障のために批准の価値がある」と述べていました。

2022年5月20日現在　核兵器禁止条約批准国 61 ヶ国




## *核兵器禁止条約第 1 回締約国会議(6 月 21 日～23 日)で何がやられようとしているか？*
## 締約国会議議長のアレクサンダー・クメントオーストリア大使が語る

５月２３日夜、ＩＣＡＮ主催で核兵器禁止条約第１回締約国会議議長のアレクサンダー・クメントオーストリア大使とＮＧＯとの懇談会ウェビナーがありました。クメント大使が締約国会議で何をやろうとしているかなどを中心に語ってくれました。以下の内容は、土田がメモを取ったものを文章化したも

のです。不十分なところもあると思いますが、締約国会議の情報をお知らせします。（日本原水協事務局次長・土田弥生）

（クメント大使の発言から）

**締約国会議でやろうと思っていること：**

１）この問題にもう一度関心を集めたい。今恐ろしい議論（多分、核抑止力依存やＮＡＴＯ加盟などと思う）がおこなわれているが、それをいい方向に持っていき、安全保障のパラダイムをつくりたい。建設的で真剣な議論を通じて、強固な安全保障をつくるためには、核兵器の人道的影響とリスクが重要である。

２）この土台となる人道の考えを再び、禁止条約とむすびつけ、条約の履行を強化したい。禁止条約に反対していても、この人道の議論に参加しないことへの言い訳は与えない。

３）禁止条約はNPTを補完するものであることを明確にする。

４）締約国と市民社会の協力を進める。

締約国会議では、重要な文書となる政治宣言を出す予定。核軍縮をするべきだというメッセージを出す。そのための行動についても案は出されている。締約国間で交渉が始まったばかりだ。

**積極的な義務について：**

これは時間がかかる問題だ。まだ始まったばかり。包括的なやり方で進める。まずは、条約の履行にとりくむ。

**ウクライナ戦争でのロシアの核兵器使用威嚇について：**

政治宣言の中に入る。禁止条約は核兵器の使用と威嚇を禁止している。使用と威嚇に反対する強固な一致点を作る。核保有国に使ってはいけないとの強いメッセージを発信する。

**締約国会議のNPTへのメッセージは？：**

一つの明確なメッセージは、禁止条約はNPTを補完するということだ。禁止条約締約国としてＮＰＴで役割を果たせられるかわからないが、禁止条約とＮＰＴに矛盾があるなんて言わせないくらい、はっきりさせる。そのために、人道の議論を押し出すことが重要。それによって、現在ＮＰＴの中で起こっている後退を前に進めたい。禁止条約を進めることは、ＮＰＴも進めることになる。

**禁止条約の履行を進めるうえでの制度的なもの：**

第４条普遍性、第６条被害についてなど、会期と会期の間に作業をする作業部会をつくる。科学的な諮問機関もつくる。柔軟で公式的なものではなく、焦点を当てた仕事ができるようにする。

**締約国会議についての情報：**

１日目：全体討論

２日目、３日目：条文ごと、各論に入る

**オブザーバー参加をする国：**

スウェーデン、フィンランド、スイス、（ＮＡＴＯ加盟国）：ドイツ、ノルウェー

日本政府は、２０日のオーストリア主催の人道の会議にだけ出席する。

２０日に国会議員が参加するプログラムがある。

ＮＡＴＯの国々からの議員が参加する。ロシアの侵略批判、禁止条約への参加をなどの点がはいった共同声明が出る予定。

**日本から参加する国会議員の状況：**

公明：平木大作 参議院議員、自民：寺田稔 衆議院議員に要請、しかし本人は行けない、立憲：行くとなれば一人、まだ決まらない、共産：笠井亮 衆議院議員

# 「核兵器禁止条約参加署名」共同提出（第一次）のつどいに参加して

三山正弘（伏見区）

日時：２０２２年4月２２日（金）１5:３０～１６:３０
会場：衆議院第一議員会館　大会議室

【報告】

日本全国の皆さんから集められた約９６万筆の「核兵器禁止条約への署名・批准を求める」署名簿を、外務省軍拡不拡散・科学部　池松英治審議官を通して、政府に提出された。

共同よびかけ人の田中・日本原水爆被害者団体協議会代表委員、児玉・同事務局長、自らも胎内被爆者であられた濱住・事務局次長らの、核禁条約の批准と締約国会議への参加、全国の被爆者の心からの訴えに続き、国会議員の皆さんからの挨拶があった。

続いて都道府県の代表者から、直接、池松審議官へコメントと共に署名簿が手渡された。

最後に、池松審議官から条約批准や締約国会議への参加についてのコメントがあったが、唯一の被爆国としての立場は表明されるも、米国との擦り合わせが必要であるとの、これまでの政府の発表とは変わらなかった。

今回は署名簿の提出が主旨であったため、参加者同士のディスカッションや政府の高度な意見は聞けなかったが、初めての公式行事？への参加で、各地の皆様の活動ぶりに、ますます、語り部を続けていく必要を強く感じた。

以上

# 核兵器廃絶運動の原点を語り継ぐ

平　信行(南区)

以下の稿は、『平和運動』誌（日本平和委員会発行）から依頼を受けて寄稿したものです。本会報に転載して紹介します。

京都「被爆二世・三世の会」は２０１２年１０月２０日に結成し、今年１０年を迎えます。結成当初から、被爆者の被爆体験を聞き取り、文章にして記録し、広く紹介していくとりくみは基本的な活動の一つでした。「会」結成直後からとりくみは始まっています。以来１０年、被爆体験を聞き取ってきた被爆者は９５人にのぼります。これを上・下巻２冊の本にまとめて出版したのが『語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心』＜上巻＞と＜下巻＞です。上巻では２０２０年７月に前半の５０人を掲載し、下巻は２０２１年１２月に後半の４５人の体験を掲載しました。

被爆者の体験を聞き取り、記録し、紹介していくとりくみにあたって、私たちは３つのことを重視し、念頭に置いてきました。

第一は、主に京都府下在住被爆者を対象に、可能な限り幅広い人たちを取材し紹介しようとしてきたことです。今年は被爆７７年。これまで被爆者の体験はたくさんの人によって語られ、手記なども書き遺されてきています。しかしそれでもなお人前で話すことはできなかった、文字にして書き著すことも難しかった、という被爆者は少なくありません。むしろそういう人たちの方がはるかに多いのではないかと思います。被爆者の平均年齢は８３歳を超え、鬼籍に入られる人も相次いでいます。何もしなければ、たくさんの被爆体験が命と共に、誰にも明かされることなく消え去り、埋もれていってしまう。そういう時にあることを実感していました。

私たちは被爆者お一人お一人を訪問し、たとえ断片的であっても被爆の体験を思い起こしていただき、語られるままに聞き取り、それを繋ぎ合わせて記録にしていく試みを積み重ねてきました。今回の私たちの訪問で初めて他人に体験を語る機会ができたという人が多くありました。

７０万人とも８０万人とも言われる被爆者。そこには７０万～８０万通りの被爆の体験があり、一人として疎かにしたり、軽んじたりすることはできません。核兵器が人間に何をもたらしたか、その真実は、本来すべての被爆者の体験、証言が語り尽くされてこそ明らかにされるものです。そこに一歩でも近づきたい。そのために、文字通り草の根からの被爆者の思いを蘇らせ、遺し、世に問うていこう、これが私たちのとりくみの原点でした。

第二は、被爆の体験とは８月６日と９日だけのことではなく、その人の人生すべてが被爆体験であるとしてきたことです。あの日の惨劇を経て生き延びることのできた被爆者も、その後の人生は苦難の連続を余儀なくされてきました。放射線を浴びたことによって命、健康が脅かされ、厳しい暮らしに襲われ、家族や人々との絆さえ絶たれてしまうこともありました。我が子や孫の誕生に悲痛な思いでのぞまなければならなかった人たちも少なくありません。原爆は、核は、人間に対して何をもたらしたか、それは被爆者の全人生によって答えられなければならない。これが私たちが被爆者と接する際の基本的な姿勢でした。

若い頃は元気でも、歳を経るにしたがって健康を損ない、晩年になってさらに深刻な病状に見舞われる、多くの被爆者が共通して経験してきたことです。健康を損ねることは仕事や暮らしに重くのしかかります。安定した職や暮らしに恵まれることのなかった人たちに何人も出遭ってきました。

一番胸を痛めるのは人々との絆、社会とのつな

がりを傷つけられる体験です。全身大火傷、大怪我の体を、家族から労わられどころか、疎まれ敬遠されたような人もありました。被爆していることを隠して結婚し、懐妊してはじめてそのことを告げ、周囲の誰からも出産を反対されて絶望の淵に立たされてしまった人たちもありました。

被爆者の人生を聞く上で一つのキーワードになっていたのが被爆者健康手帳（被爆者手帳）取得の時期とタイミングでした。被爆者はみんながスムーズに手帳の交付を受けていたわけではありません。親から「手帳を取得すると被爆者であることの証となる。だから絶対に手帳の取得をしてはならん」と言われて生涯手帳を手にすることのできなかった人もあります。晩年になって家族とのしがらみも解け、初めて手帳交付の申請をした人もありました。手帳交付の厳しい審査基準に阻まれて、手帳を得るのに長い期間、時間を要した人もありました。いつどのようにして手帳を取得したのか(しなかったのか)、そのことを尋ねると、そこにその人の歩んできた人生が浮き上がってくるように思いました。

被爆者は苦難の人生に甘んじてきただけではありません。困難に立ち向かい、差別や偏見を乗り越え、襲いくる病魔とも闘い、明日の希望を求めて生きてきた人々でもありました。国の被爆者切り捨て政策に抗して、被爆の実態に即した原爆症認定制度を求めて集団訴訟に挑んだ人々からも聞き取りをしてきました。法廷では赤裸々な被爆人生の告白が求められます。勇気を奮い起こし、様々な葛藤を乗り越えて証言台に立つ人々の姿には多くの事を教えられてきました。

放射線を浴びたことによる健康障害を克服しようと食材や食生活のあり方を追求し続け、「原爆に負けない、放射能に負けない」人生を全うしようとした人々もありました。

被爆が原因で生まれて間もない我が子を喪った被爆者の中には、悲しみの中からも、「我が子が背中を押してくれた」思いで、語り部となる決意をし、生涯語り続けてきた人もありました。

第三は、私たち被爆二世・三世が自らの親、祖父母の体験を語り継いでいくことを大切にしてきたことです。上・下巻あわせて９人の被爆２世が登場し、自身の親の体験を綴っています。放射線の人体に対する影響は世代を超えて続く可能性が高いと思っていますし、多くの実例がそのことを示しています。不安を抱く人たちも少なくありません。いわゆる放射線の遺伝的影響は被爆２世・３世が負っているいる当事者としての課題です。

被爆者が生涯かけてたたかってきた核被害者の救済と核兵器廃絶の運動に加えて、被爆２世自らが負っている課題。担い手は被爆者世代から私たち２世、さらに３世、４世の若い世代に移っていきます。親の体験と生き様から何かを学びつつ継承し、私たちや次世代に課せられた課題を乗り越えていかなければならないと思ってきました。

核兵器禁止条約の批准が６１ヶ国に達し、核廃絶に向けた世界の歩みは確実に進展し広がっています。一方で核兵器に固執する国々は、ＮＰＴの規定や再検討会議の合意にも反して核軍拡競争の悪夢の再現に向かう危険な動向を強めています。ロシアのウクライナ侵攻に際してはプーチン大統領が核兵器使用にも言及する重大事態も発生しました。この機に乗じた日本国内での核共有論、非核三原則の見直し論も登場しています。

核兵器禁止条約に背を向ける日本政府の姿勢も正し、世界の核廃絶運動を緊急に、圧倒的に強めていくことが求められています。その原点は、被爆の実相、原爆が人間に何をもたらしたのかを具体的に語り継ぎ、繰り返し世に明らかにしていくことにあります。

２冊の本と、私たちのとりくみがその一旦を担うようにしていきたいと思っています。

# 会員から会員へ　✿　みなさんからのお便り紹介

他地域の２世・３世の方からいただいたお便りも紹介いたします。

**■「徴用（しょう集）」の「しょう」は「召」**

**久米弘子**（市民共同法律事務所・弁護士）

いつも内容の濃い会報で楽しみにしています。

４月２５日号の P6 上から１０行目「徴用（招集）」の「招」は「召」の誤記ですね。招かれて行ったのではなく、召されて（命令されて強制的に）集められたものです。国会の召集も、天皇の行う国事行事（召集の決定は憲法上内閣の責任で行われるが）と定められているので「召」の字を使用します。大事なことなので、指摘させていただきました。

昨年、今年と、戦争体験者が新聞に投稿されたり、インタビューに応じての記事が増えているように思います（以前は、東京などの大空襲、原爆投下、終戦の日などの前後に特集があって一年が過ぎるという感じでしたが）。その誰もが戦争は２度とあってはならないと言っておられます。当然のことながら、８０代・９０代になっても忘れることのない思いなのですね。

私は終戦の時３歳になったばかりでした。戦後の食べ物のない時代の記憶が今も忘れられませんし、今はなき父母が「戦争は二度とイヤだ」とポツリポツリ言っていたことも覚えています。憲法のおかげで戦争のない時代を生きてこれました。

ウクライナの惨状に一日も早い救いを思わずにはいられません。

**■今年の平和行進、京都府内通し行進を歩きます**

**小林孝企**(宇治市)

今年の平和行進で京都府内の通し行進を歩くことになりました。体力的にはまだなんとかなりそうなんですね。地域でも「歩く会」の世話人をさせていただいていますし。２年前から通し行進歩きたいと言っていたのですがコロナでできませんでした。今年こういう機会に恵まれましたのでなんとか頑張って歩きたいと思います。３月に手術をしたのですがその後の経過もよさそうで、４月、５月も普段の通常ペースで歩いていて、一日平均８，０００歩～１万歩ペースで歩いていますので大丈夫かなと思っています。

**■父親の日記も展示されている広島原爆資料館の企画展**

**石角敏明**(長岡京市)

この前、広島の原爆資料館から手紙が来まして、今、企画展で「医療と原爆」というのをやっていて、私が親父の日記を寄贈していたのです。もう５～６年前。原爆投下の時のことを書いていた日記なのですが。それを展示しているので是非見に来いということで案内が来ました。

そのことを子どもにいったら、小学校５年生になる孫が、ものすごく原爆のことに関心を持っているということで。私はいつも原爆の本を田舎の方に持っていっているのですが、孫がいつもそれを見ているという。３世より４世の方が関心を持ってくれているなあということで。こうの史代さんの漫画も一生懸命読んでいる、写真集も熱心に見ているよ、ということで。

みなさんも広島に行かれたら是非資料館の企画展を見に行かれたら、と思います。９月３０日までだったと思います。

**■ウトロ平和祈念館のオープン**

**小林孝企**(宇治市)

先日オープンしたウトロ平和祈念館。私すぐ近くに住んでいて、地域の町内会の連合の役員もしばらくしていたので、そういう関係からサポーター募集もされているので、サポーター登録もしました。月に２～３回は当番で会館のお手伝いをさせてもらっています。

ウトロウィークが４月３０日にオープンして５月４日までだったのですけどほぼ毎日３００人から４００人の来場者があって、非常に盛会でした。地域の方も高齢化されているのですけど、住宅も新しく完成していますし、そのためにウトロ祈念館はできています。その一角に展示予定だった資料が放火されるという事件がありましたけど、その資料も再現されて展示されています。是非みなさんも見学されますよう案内します。

**■この夏、「河野キヨ美さんに会いに行くツアー」を考えてみては**

**庄田政江**(大阪市平野区)

この前米重さんから「河野キヨ美さんに会いに行くツアー」をしてはどうかという話があったのですけど、もし８月６日とかに、そういう企画ができるようだったら、考えてみたらどうかと思います。ひょっとしたら６月か７月頃に、広島での私の被爆体験伝承者事業の実習があるかもしれないので、河野さんにお会いできるチャンスがあるので、聞いてみてもいいかなと思っています。

**■大阪カジノ住民投票めざして**

**山下恵江**(高槻市)

大阪府は激動のこの２ヶ月でした。カジノの是非を問う住民投票を実現させるための署名運動でもう疲れて疲れて。原発事故避難者のみなさんも、被爆者のみなさんも手伝いにきていただいて、まだなかなかですが頑張ってきました。みなさん応援して下さい。住民投票にするには１５万筆の署名、有権者の２％が必要なんです。それで議会に提案してもどうなるかは分からないのですけど。まだ８万。みなさんもう倒れそうですけど。

**■「原発のあることの不安と原発がなくなることの不安」の間で**

**守田敏也**(左京区)

４月の２３日(土)に越前市で初めて講演してきました。越前市の防災危機管理課の共催です。その翌日に美浜町で講演しました。美浜町で講演したのも初めてです。５０人ぐらい集まって２３人が美浜町から来られて１９人が小浜からだったので主催者の方たちは大成功だと言っていました。両方とも町議だとか市議、県議が５人ずつぐらい来て、一番感動したのは、ずーっと杖を突きながら来たおじいさんが美浜原発の目の前に住んでいるそうで、「この会場に来るだけでドキドキするんや」と言って来てくださって。

美浜町議の方が言ったのですけど、「美浜町民の思いは原発のあることの不安と原発がなくなることの不安」だそうです。その間はすごく揺れているということで、私は講演では「廃炉になったら廃炉の仕事があります。だから仕事がなくなるわけではありません」。ただそれも被ばく労働の仕事なので決して勧められる仕事ではないですけど、ただ今までの仕事がなくなるわけではないです、という話をしてね。今まで国策を支えようとしてこられたわけですから、その方たちが酷く捨てられるような形での廃炉になってはいけない、というようなことを強調してきました。その辺りのことがすごく大事なポイントなのだなと思いました。

今週は５月２２日(日)に長浜市で講演してきます。長浜は原発賠償京都訴訟を担当していた裁判長が市長になったのですよ。びっくり。避難者に温かい言葉をかけ続けてきた裁判長で、現役の裁判官の中で一番避難者の声を聞いてきた人ではないかと思います。その長浜にも行って、原子力災害対策をやるということを勧めたい、と思っています。

# 本・DVD・映画・番組・その他の紹介と交流

## ■ ２０３４　米中戦争　　エリオット・アッカーマン　ジェイムズ・スタヴリディス　著　　熊谷千寿　訳

紹介　米重節男（向日市）

二見文庫
１，３００円(＋税)

プーチンのウクライナ侵略で、核戦争が起こるのではないかと、世界中の目がロシアとウクライナに注がれています。本書は、この今を先取りしたような、米国と中国の核戦争を描いた近未来小説です。

話は２０３４年３月、南シナ海で３隻の米国艦隊が、「航行の自由」作戦を遂行中に、中国軍が巧妙に仕組んだトラブルに巻き込まれ、４か月間で米中双方が互いに核攻撃をする戦争に拡大します。２隻が撃沈される事件とほぼ並行して、イランに不時着させられた米軍パイロットが捕虜になります。これらを巡って、米中の両海軍が南シナ海で激突し、米国は空母打撃軍２編成が壊滅する大敗北です。米国は戦術核兵器で、中国の軍港都市に報復攻撃します。中国は米国の２都市に核攻撃をし、さらに米国は中国の３都市へと、軍事の常識だと拡大していきます。

この展開は、米国が対応するであろうと中国が想定したことが、違う方向に進んだ誤算によるものです。プーチンのウクライナ侵略は数日で終わるとしたのが誤算で、長期化しているのと似た話になっています。

世界を巻き込む核戦争になるのを阻止するために、インドが米中両国を攻撃することで、米国の核攻撃は目標とした３都市の内、上海への攻撃で戦争は終わります。それも、高度化した先進ハイテクノロジーシステムの盲点を突く形で、兵士の五感と経験を基本とする旧式のローテクノロジーを駆使して、上海への核攻撃をします。

著者の２人は、海兵隊特殊部隊員、海軍提督だった人で、本書ではその経験から得た知識や情報が描かれています。外交や政治面の動きと、登場人物の生活と感情の変化をたどった政治小説というものでしょう。

登場人物には、米国現代史上初の政党に所属していない女性の大統領、これも女性の米国海軍の艦隊司令官と艦長の女性３人があり、話の中心となっています。さらに、国力を増して世界を動かす中国とインドが舞台になります。ロシアやイランも出てきます。日米同盟が叫ばれていますが、本書では日本政府や自衛隊は出番がなく、描かれていません。わずかに米艦隊が横須賀を母港としていることが出てくる程度で、２０２３年の日米同盟や日米関係のことなどは触れられていません。米中戦争での日本政府の関与も触れられていません。米国の核攻撃に対する中国の反撃の攻撃対象は、日本の米軍基地はなく直接米国本土の都市です。いま、日本で声高に叫ばれる日米同盟主軸論や強化論が、米国側からすれば日本で言うほどの位置づけにはないのか、あるいは小説としての物語を重視して、触れないのかと感じます。

この小説で描かれていることは、ウクライナ戦争後の世界を見る思いがします。核攻撃で数億人に及ぶ被害が生じますが、そのことは数行で触れているにとどまり、被爆の実相や核戦争の結末と人々に及ぶ影響をリアルに描くことはありません。

ロシアがウクライナへの侵略戦争で「勝利」の見通しがつかない現在、核兵器を使うのではと懸念されていますが、核戦争は小説で終わってほしい限りです。どんな理由があれ、核兵器の使用は許されな

いと叫ぶ日々です。

＊この書評は２０２２年５月１日発行「宣伝と組織」№６０２（一般社団法人京都宣伝センター機関紙会館・日本機関紙協会京滋地方本部）に掲載されたものに追加補正して転載するものです。

## ■ 追跡！謎の日米合同委員会　　吉田敏浩　著

紹介　**石角敏明**（長岡京市）

毎日新聞出版
1,980 円(税込)

著者は紹介するまでもないが、「横田空域」問題をはじめ、日米の密約問題を鋭く追及してきたジャーナリストである。この本も「サンデー毎日」に随時連載された記事を、大幅に加筆したものという。しかし、このような記事が週刊誌に連載できたものだ、と少し驚く。

「日米合同委員会」をめぐる問題点が論じられているが、その内容は多くの国民が全く知らないだらけである。沖縄の基地・米兵の犯罪が問題になるたびに「地位協定」が問題になるが、その問題以上に深刻なのが、この「日米合同委員会」である、と著者は指摘する。新型コロナ問題で「地位協定」が問題になり、「改定を」という声が起こったが、著者は「地位協定さえ守られていない」と警鐘を鳴らす。文官対軍人という異様な委員会構成、国民の代表たる国会に合意内容を知らせないばかりか、閣議にさえ具体的な内容は報告されない委員会での合意事項。「松本清張」の著書を紹介しながら、日本はいまだ米軍の「占領下」にあると指摘する。それは占領政策が形を変えて、日本の「憲法体系」とは別の「安保法体系」をつくりあげ、「日米地位協定」の条項を越えた内容で合意し、日本がアメリカ軍に便宜をはかっているという。いま日本が真に独立国としてどうあるべきか、を鋭く問いかけている本である。

## ■ 帰れない村　　三浦英之　著

紹介　**石角敏明**（長岡京市）

集英社文庫
６８２円(税込)

あの「ＤＡＳＨ村」があった村の記録というのか、村民の想いが赤裸々に語られている。この村、満州から引き上げてきた住民が開墾した集落であるという。国の政策で、２度３度と悲惨な体験を強いられた人々の記録でもある。でも、「文章」が詩的表現で、スムーズに読めるだけに、怒りがこみ上げるし、哀しくもある。そして、今も村民が厳しい条件下に置かれ苦しんでいることを知ることが出来る。人間としての「声」「思い」が表現されている。

一人一人の声を紹介したいのだが、「少しだけでいい、この小さな本を読み終わった後に少しだけ、福島について考えてほしい・・・・・・」という著者の思い、願いを紹介する。

Scrap book

## ■被爆の傷　心身から消えず

京都新聞・読者の声　城陽市・榎　郷子（無職・８７）

ウクライナの伝統楽器「バンドゥ～ラ」奏者として、日本で活動するカテリーナさんの演奏を、何年か前に聴きました。当時はただ彼女の美しい容姿と演奏にうっとりしていたのですが、５月１１日付夕刊の記事で、彼女がチェルノブイリ原発事故の被災者だったことを知りました。

私も、１１歳の時に広島の原爆の被害を受けたことや、次女が２０年余り前にチェルノブイリ周辺で行われた競技会に参加した際、日本から飲食物を持参し、現地の食品を口にしなかったことなどを思い出しました。あのチェルノブイリの事故の影響は、何十年たっても土地や人々の体、心から消えていないのですね。

私たちは、「被爆二世・三世の会」のおかげで「語り継ぐヒロシマ・ナガサキの心」という本を出してもらうことができ、私も一文を載せてもらいました。原爆被害の経験を忘れず、強く語り続けて生きていきたいと思っています。

（２０２２年５月２７日　京都新聞）

## ■福島第１原発事故　甲状腺がん訴訟　東電側争う姿勢　東京地裁口頭弁論

「東京電力福島第１原発事故による放射線被ばくの影響で甲状腺がんになったとして、事故当時６～１６歳で、福島県に住んでいた男女６人が東電に計６億１，６００万円の損害賠償を求めた訴訟の第１回口頭弁論が２６日、東京地裁で開かれた。被ばくと甲状腺がんとの因果関係が争点で、東電側は「がんを発病するほど被ばくはしていない」と争う姿勢を示した。

東電側は、国と福島県が２０１１年３月下旬に原発周辺の子ども約１０００人を対象に実施した調査で、約４５％に甲状腺被ばくがみられたものの、線量はわずかだったと指摘。国連放射線影響科学委員会（ＵＮＳＣＥＡＲ）が１４年に公表した報告書でも、事故による「多数の甲状腺がんの発症はない」と主張している。

この日の弁論では、原告の２０代の女性が、福島県の調査でがんが見つかり、大学入学後に再発したため、中退せざるを得なくなったと説明した。訴状によると、６人はいずれも１２～１８年に甲状腺がんと診断され、うち２人が手術で甲状腺の片側を切除し、４人は再発により全摘した。

（２０２２年５月２７日　毎日新聞）

## 編集後記

▼５月２３日の日米首脳会談で来年のＧ７サミットの広島開催が明らかにされました。ロシアによるウクライナ侵攻で核の脅威が高まる中、被爆の実相を世界に発信する上で、被爆地・広島の開催がふさわしいと判断された、とのことです。しかし、ちょっと待って欲しい。Ｇ７とは、核兵器保有国のアメリカ、イギリス、フランス、アメリカの核を共有するドイツとイタリア、そしてアメリカの「核の傘」にずっぽりとはまった日本とカナダではないですか。核兵器禁止条約を一貫して敵視し、ＮＰＴ再検討会議での数々の約束事を反故にしてきた張本人たち。彼らが広島に集まって、一体何を話し合い、何を発信するというのか。まるでブラック・ユーモア。被爆の実相に本気で学ぼうとするなら、まず今年の核兵器禁止条約第１回締約国会議とＮＰＴ再検討会議に向き合う姿勢を改めなければならない。Ｇ７の広島開催が単なるパフォーマンスとなることを被爆者は強く拒否するでしょう（平）

# ２０２２年6月（水無月）行事カレンダー

| 月 | 日 | 曜 | 行　　事 |
|---|---|---|---|
| ６ | １ | 水 | |
| | ２ | 木 | |
| | ３ | 金 | 大飯原発差止訴訟第３３回口頭弁論(１４時３０分・京都地裁)　　キンカン行動 |
| | ４ | 土 | 大飯原発差止訴訟京都第１０回原告団総会(13 時３０分・ハートピア&オンライン) |
| | ５ | 日 | 公開講座「被爆二世健診…４３年目の真実」(13 時３０分・オンライン) |
| | ６ | 月 | ６・９行動<br>安保法制違憲訴訟京都控訴審第１回弁論(１１時・大阪高裁) |
| | ７ | 火 | |
| | ８ | 水 | 原発賠償京都訴訟控訴審第１４回期日(１４時３０分・大阪高裁) |
| | ９ | 木 | ６・９行動 |
| | １０ | 金 | ２０２２年国民平和大行進プレ企画(18 時３０分・八幡市男山公民館)<br>キンカン行動 |
| | １１ | 土 | ノーモア・ヒバクシャ近畿訴訟支援のつどい(13 時３０分・大阪グリーン会館) |
| | １２ | 日 | |
| | １３ | 月 | |
| | １４ | 火 | |
| | １５ | 水 | 通常国会会期末 |
| | １６ | 木 | 京都「被爆二世・三世の会」６月例会(18 時３０分・ラボール京都) |
| | １７ | 金 | キンカン行動 |
| | １８ | 土 | |
| | １９ | 日 | 安保法制廃止をめざす１９日行動(16 時３０分・京都市役所前)<br>父の日 |
| | ２０ | 月 | |
| | ２１ | 火 | 夏至<br>２０２２年国民平和大行進　滋賀→京都引き継ぎ集会(12 時３０分・ラクト公園)<br>核兵器禁止条約第１回締約国会議　→　６月２３日(木) ウィーン |
| | ２２ | 水 | 参議院選挙公示(予定)<br>２０２２年国民平和大行進　向日市・長岡京市・大山崎町・八幡市 |
| | ２３ | 木 | *新安保条約発効(1960 年)*<br>２０２２年国民平和大行進　宇治市・城陽市・久御山町 |
| | ２４ | 金 | ２０２２年国民平和大行進　京田辺市・宇治田原町・井手町<br>和束町・笠置町・南山城村　　キンカン行動 |
| | ２５ | 土 | |
| | ２６ | 日 | ２０２２年国民平和大行進　精華町・木津川市　→　奈良県へ引き継ぎ集会<br>第６７回京都母親大会(14 時・京都教育文化センター) |
| | ２７ | 月 | |
| | ２８ | 火 | 2022 年国民平和大行進　綾部市・福知山市(大江・夜久野) |
| | ２９ | 水 | 2022 年国民平和大行進　福知山市(市街・三和) |
| | ３０ | 木 | 2022年国民平和大行進　京丹波町 |